

資料渉猟余話

その62

昨年の暮れも押し迫った十二月十六日から

二十日まで、飯田市銀座スクランブル交差点角のギャラリー吾亦紅で、飯田市出身で県歌信濃の国でも唄われている太宰春台展が行われた。春台は江戸時代の儒学者で幼い頃より江戸へ出た事で、飯田人との交流も少ないと思っていただけに、二十点余の作品が揃って展示される事への驚きもあって見に出掛けた。

答松崎子黙送別

一曲陽関傳玉杯
對君又自覺顏開
却悲身是西遊客
泣立東隅芝水隈

中国で別れの時に唄

太宰春台展を見て

松崎子黙とは

嶋岡成美

陽関三疊の詩を吟じ、君の顔を忘れない様に、顔を見ながら別れの盃を重ねる。君は西へ旅立つと言う。私は泣いて紫芝園の小川のほとりで君を送るの

だ。と言うのだろうか。展覧物の中にこの書体の軸が二本あり書体は酷く似ていた。店主に聴くと同詩はもう一本表に展示してあると言

る。するとこの子黙なる人物はそれなりの大物門弟ではないかと。そこで又々調べる。

「日本歴史人物事典」だ。松崎を探す。松崎観海（一七二五～一七七六）漢学者、兵庫庫裏篠山の人「十三歳の時、江戸に出て儒学を太宰春台に、詩文を高野蘭亭に師事す…」と、そして春台の欄を見て、春台（一六八〇～一七四七）とあり文中に「…以後は官途に付かず私塾紫芝園を経営し松崎観海らの弟子を育てた」とある。さてそこに観海の所に

子黙の字がない。そこでもうひと押し、探した。あった。名は惟時、字子黙、号を観海といい、父は子允と言い観瀾と言う事からの命名と解り、十三歳で江戸へ上り、二十一歳の折父の退隱により江戸を辞する折り頃の詩であり、春台の秘蔵つ子の子黙に送別の会を催し参加者の幾人かに配られた詩文だろうと。それにしても個人への送別詩が飯田に複数本ある事の不思議、旧市以外の地からの出所という。飯田からの門弟または関わりの人

ながら、その門に集う者は後をたたなかつた」という。父観瀾も春台・蘭亭と親しかつたといい、親子二代の家督を嗣ぎ篠山藩に出仕、晩年は家老の待遇を受け、経学・詩文と名声が高く、一藩の戸麻布の天真寺にある



詩句を確認する著者